



埼玉医科大学 総合医療センター 血液内科



Heart、Mind、Passionを大切に。 臨床、研究、教育面で 世界に発信できる成果をあげる

移植や早期臨床試験などあらゆる治療選択肢を用意して、造血器腫瘍をはじめとする難治性の高い血液疾患と闘う埼玉医科大学総合医療センター血液内科。日常診療の現場からあがってきたさまざまな課題や問題を、基礎・臨床研究活動を通じて解決、再び臨床に還元し、治療の可能性の拡大に心血を注いでいる。この教室を牽引する木崎昌弘教授がめざすのは、臨床、研究、教育面での卓越した成果を、日本はもちろん、世界に向けて発信していくこと。着実な前進は今も続いている。

木崎 昌弘 教授

森 茂久 教授

(医学教育センター兼任)

得平 道英 准教授

渡部 玲子 講師

(無菌室室長)

多林 孝之 講師

阿南 朋恵 助教

(社会人大学院生)

佐川 森彦 助教

富川 武樹 助教

(社会人大学院生)

木村 勇太 助教

(シニアレジデント)

高橋 康之 大学院生

(初期臨床研修医)

■ 外来患者数 平均57名/日
(2013年)

■ 入院患者数 平均42名/日
(2013年)

■ 造血幹細胞移植数 32
(同種移植13、自家移植19) (2013年)

■ 病床数 定床29床(無菌室7床)

■ 関連病院

埼玉医科大学病院

埼玉医科大学国際医療センター

埼玉社会保険病院

イムス富士見総合病院

南古谷病院

三井病院

帯津三敬病院

埼玉よりい病院

康正会総合クリニック



週に1度の研究ミーティング。成果報告やデータ解析を行い、今後の課題などを徹底して話し合う



造血器腫瘍の病態解明と分子基盤に基づく治療法の開発に向け、多忙な臨床の合間を縫って研究が続けられる



教室員のコミュニケーションは良好。カンファレンスでは、全員が積極的に、建設的な意見を発言する

1972年に県内初の医学部として埼玉県毛呂山町に創設された埼玉医科大学。85年には川越市に埼玉医科大学総合医療センターが誕生し、そこに膠原病と血液疾患とを担当する第2内科が開設された。その後、2007年に第2内科はリウマチ膠原病内科と血液内科とに再編され、新たに血液内科教室の初代教授に着任したのが、造血器腫瘍を専門とし、国内外で研鑽を積んできた木崎昌弘教授だ。教授は、7月1日の就任当日、教室員に向け、血液内科がめざす4つの具体的な目標を掲げた。

第1に、学内、病院内で信頼される科であること。第2に、地域に貢献すること。第3に、国内で存在感と影響力を示すこと。そして第4に、田んぼの中から世界に向けて情報を発信できる科となること、だ。

「当センターは、田んぼに囲まれています。こののどかな田園風景の中にあつて、世界をリードする研ぎ澄まされた臨床、研究、教育を実践し、その成果を迅速、かつ広範に伝えていきたい」と木崎教授は柔らかな口調に確固とした決意を込める。

病態のメカニズムを解明して 新たな治療法を開発、応用する

4つの目標を実現するには、「臨床、研究、教育のすべてを高次で融合しなけ

ればなりません」と木崎教授は説明する。そのうえで、臨床面では、急性・慢性白血病や悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの造血器腫瘍を中心にあらゆる血液疾患を、最初から最後まで診ることのできる自己完結型の施設をめざしている。2013年度の日本血液学会血液疾患症例登録件数は全国第2位。埼玉県に専門の施設や医師が少ないため、患者がここに集中するという面もあるが、もちろんそれだけではなく、適切かつ挑戦心にあふれた診療で県内外から多くの患者を呼び込んでいる。

血液領域にはいまだ治療困難な疾患も少なくないが、「闘う血液内科でありたい」と木崎教授が言うように、教室では治療の可能性が残る症例に対しては、骨髄移植、末梢血幹細胞移植、臍帯血移植などの造血幹細胞移植に加え、エビデンスに基づくあらゆる選択肢を用意し、諦めることなく果敢に闘い続ける。新規薬剤を用いた全国規模の早期臨床試験にも積極的に、現在、およそ40もの臨床試験を同時進行中。既存のチョイスでは対応できない症例に対し、治療の方向性を必死に探っている。

しかし、やれることをすべてやって、なお救い取れない命もある。「だから、臨床の基本はHeart(まごころ)にある」と木崎教授は確言する。「闘うだけでなく、あたたかなこころを持って患者さんと接することのできる血液内科医で

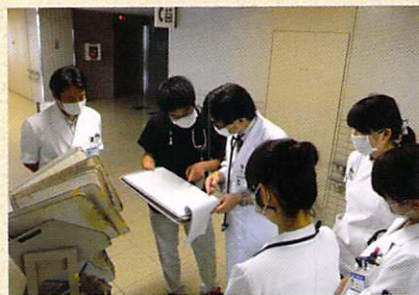
あろうと、みなが胸に刻んでいます」

一方、研究面において「重視されるのはMind(知性、精神性)」。日々の臨床からわき上がる課題を客観的に見きわめて、解決のために何が必要か地道な検討を繰り返す。そこでは、教室員個々人が、妥協することなく、研究課題と対峙しながら、自らを高めていくMindが不可欠である。

現在もつとも力を入れている研究テーマは、造血器腫瘍の病態の解明と分子基盤に基づく新たな治療法の開発だ。その多くを、教室内だけでなく、他科や他の研究施設と共同で実施している。たとえば、同センター病理部とは、悪性リンパ腫のデータベースを共同で構築中。「病理部の田丸淳一教授は悪性リンパ腫の権威 私たちの臨床データとマッチングすることで、さまざまなリンパ腫の病態解明や新規治療法開発に役立つのではないかと考えています」と言い、すでに現在500例ほどが集計されているという。また、東南アジアに自生する植物ACA※(京都大学農学部から供与)が、骨髄腫細胞のアポトーシスを引き起こすことを見出したのは、数ある成果の中でも独創的なもの。現在、東京大学分子生物学研究室とともに、臨床応用可能な新規薬剤の開発を推進中だ。

加えて、先に掲げた40に上る全国規模の臨床試験など幅広いトランスレーショナルリサーチを推し進めており、日本血

※Acetoxychavicol acetate: 東南アジア原産の植物でシヨウガ科のナンキョウの根茎に含まれる成分



週に1度の病棟回診。医学部5年生のベッドサイドラーニングの一助ともなっている



病理部の糸山進次名誉教授や田丸淳一教授を交えて合同カンファレンスを隔週で開催。より正確な診断や研究の進展に役立っている

液学会が2010年から実施する慢性骨髄性白血病の観察研究（新TARGET T）では、初発症例の登録数で全国1位と、その積極的な取り組みが全国的に注目されている。

教室の魅力を若い世代に伝えながら すぐれた後進を育成する

血液内科の醍醐味は、こうしたたゆまぬ研究活動と臨床応用を通し、治らぬ病を治せるようにすること、希望の光を照らすことだという。教室では若い世代にその魅力を伝えるべく、医学部生教育にも力を注ぐ。

「身を以て臨床現場に接してもらおうのが一番」という木崎教授は、医学部5年次のベッドサイドラーニングや、クリニカル・クラークシップで、医学部生に医療チームの一員に加わってもらい、血液内科の真価に触れてもらうのだという。

入局した教室員に対しては、「個人の目標をしっかりと持ってほしい」と、内科認定医、血液専門医、学位の取得を推奨する。「資格や学位の取得過程を通して、各人が臨床面、研究面でも磨かれることを期待している」からだ。

血液内科教室が誕生して7年。就任時に掲げた目標のうち、院内・学内での信頼感は確かに醸成され、地域や国内における存在感も示している。国際的な視野を持って、高度な臨床、研究

を推進し、すぐれた人材育成にも余念がない。そんな教室のこれからのもっとも大きな課題として木崎教授があげるのは、「後進の育成」。そこで試されるのが「Passion（情熱）です」と教授は言う。「私自身も、また教室員各員も、熱意を持って学ぶことを忘れず、常に自らを高めようとするのが大切です」。それが臨床や研究の充実、ひいてはすぐれた血液内科医の形成につながっていく。

そんな教授の思いを裏打ちするように、埼玉医科大学では、『研究マインド育成自由選択プログラム』という新たな教育システムを2013年度からスタートさせた。これは、木崎教授が運営委員長を務める埼玉医科大学大学院などが中心となっておよそ3年の議論の末に構

築されたプログラムで、研究志向の強い医学部生が、卒業後すぐに初期臨床研修を行いながら、同時に社会人大学院生として研究活動にも従事できるというきわめて先駆的な試みだ。

「その第1期生として、1名が血液内科を選んでくれました。彼を含め、当教室の教室員はみな確かな志を持って入局しています」と教授は微笑んで、「桃李もの言わざれども下自ずから蹊を成す」と史記の一節を詠じた。

桃やすももは何も語らずとも、その美しい花や果実を慕って人が多く集まり、自ずとその下には道ができていく……。

教室それ自体が人を魅了する徳望を備えることが後進の育成につながるのだと、木崎教授は問わず語りに語っていた。

Message From Professor

30年ほど前、研修医としていくつかの診療科を回る中でとくに私の目に焼き付いたのが、急性白血病のために亡くなった若い女性の患者さんの姿でした。こういう病と闘うことこそ医師の使命、そう考えて飛び込んだのが血液学の世界です。今も血液内科領域には難治性疾患が多数存在していますが、医学の目覚ましい進歩によって新しい薬剤や治療法が開発され、たくさんの疾患が治療できるようになっています。これからも「一生勉強 一生青春」という私の好きな相田みつをさんの言葉を胸に、若いときの志を忘れず、常に真摯に学び、探求し、不治を治療へと変えていきたいと思います。



木崎 昌弘 教授

1955年 東京都生まれ
1980年 慶應義塾大学医学部卒業、同大学病院内科研修医
1982年 日本鋼管病院内科医員
1984年 慶應義塾大学医学部内科助手
1988年 米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）血液腫瘍科博士研究員
1996年 慶應義塾大学医学部内科専任講師
2007年 埼玉医科大学総合医療センター血液内科教授
2010年 埼玉医科大学医学部長補佐、同大学院医学研究科博士課程運営委員長を兼任
日本血液学会理事・代議員、日本癌学会評議員、日本臨床腫瘍学会評議員、日本骨髄腫学会幹事、日本検査血液学会評議員などを務める。